

中 卷

日本仏教の全盛期はいつか。景戒は、聖武天皇の時代とする。日本仏教の全盛期である聖武天皇の時代には多くの「靈異」が顕現した。その「靈異」を描いた靈異説話集を根幹として、この中巻は成っている。

因果応報や靈験を超えた「あやし」の世界を描いた説話集として本書はとらえることができるのだが、やはり根幹となつてゐるのは、「現報善惡」を描いた因果応報説話と、「靈異」を描いた靈異説話と、である。

基本的に本書は「仏教」説話集なのであり、この中巻もその範囲を出るものではない。

中巻第二十四縁、第二十五縁、第三十三縁などの「あやし」の世界を描いた説話のもつおもしろさは本書の重要な側面なのだが、義師寺の沙門景戒の説く仏教に耳を傾けることを忘れてはならないであろう。

因果の理の普遍性を確認しつつ（現報善惡）、仏の常住を確認しつつ（靈異）、日本仏教史が叙述されているのである。この叙述それ自体のもつ思想性は十分に研究されてきたであらうか。

因果応報説話や靈異説話のもつ「道具」としての性格の解明が十分になされてきたであらうか。

日本国現報善惡靈異記 中巻

諸樂の右京の薬師寺の沙門景戒録す

竊に上代を觀れば、宣化天皇より以往は外道に随ひト者を憑む。欽明天皇より後は三宝を敬ひ正しき教を信ふ。然うして或る皇臣は寺を焼き仏の像を流す。或る皇臣は寺を建て仏の法を弘む。之の中に勝宝応眞聖武太上天皇、尤くして大なる仏を造りたまひ、長に法の種を紹きたまふ。鬚髮を剃り袈裟を著、戒を受け善を脩ひたまひて、正を以ちて民を治めたまふ。慈は動植に及び、徳は千古に秀づ。一を得て運に撫り、二を通りて靈を居めたまふ。此の福徳に由りて、空を飛ぶ鰲は芝草を咋ひて寺を韋く。地を走る蟻は金の沙を構へて塔を建つ。法の幢高く聳ちて幡足八方に颯く。慧の船輕く汎びて帆影九天に颯く。瑞応の華は競ひて国邑に開く。善と惡との報は現れて吉凶を示す。故に号けて勝宝応眞聖武太上天皇と稱したてまつる。ただし是の天皇の代に録す所の善と惡と表との多数なるは、聖皇の徳に由る。顕るる事最多く、

序 善惡の報、あやしき表(一)、が多く顕現した聖武天皇の御代が賛美される。「或皇臣焼く寺以下」(故号(稱)勝宝応眞聖武太上天皇)高まで東大寺要録二に引用。  
一 内典がまだ伝来しない時代。この中巻序が延暦六年原撰本に含まれていたならば、宣化天皇という漢風發号の初出例となる。二 「外道」は仏教徒の立場でいう語。古代信仰を「邪」として把握したもの。「かみなき」は神を祭り神の託宣を伝える者。三 内典外典ともに伝来した時代の第一期、第二期について述べる。四 物部守屋。内典外典ともに伝来した時代の第一期。書紀、敏達天皇十四年(553)三月条、本書上巻五縁。五 大節屋野古か。内典外典ともに伝来した時代の第一期。上巻五縁。六 内典外典ともに伝来した時代の第二期(原撰本の中巻に對応)を聖武天皇によって代表させている。統紀、東大寺要録などに関連記事がみえる。以下に聖武天皇の御代が賛美される。セ 道を得て天運にしたがう。帝王の徳。ハ 天地人のはたらき(三才)を理解し神祇を慰める。帝王の徳。「得て明、通三無運(進五經正義表)」「得て一三三(文鏡秘府論・帝德録)」。ハ 未詳。  
「隱はナゴ。五之章」は靈芝。王が怒になるときに生ずる(守選李善注・六觀部賦)。「五之章」似「珊瑚、枝葉連結、或丹或紫、或黑或金色、或隨四時變色」、一云、一年三華、食之令眉壽。二(延喜式・治部省祥瑞)。二 未詳。芝草と金沙とは、大仏靈願の詔(統紀・天平十五年(743)十月十五日条)にみえる一枝草、一把土に對応。二 帝王の徳に應じて天は祥瑞をあらわす、とされ、「瑞應」とよばれた。聖武天皇の徳が賛美されている。三 「瑞應之華」と「善惡之報」とが対句になっている。善惡の報が

顕現するのも帝王の徳による、とする論理。下文に「由聖皇德」とみえる。三 仏教者としての徳をも有するがゆえに尊号に「応眞」(阿羅漢)の意訳として用いられたの語を含む、という論理か。

一 底本破損。二 底本破損。三 惡を咄む者は。四 打擲される。↑上巻三十縁。五 善惡の果報はそれぞれの業因によって決定されており、求めて得られるものでもなく、嫌つて避けられるものでもない、と説く。果報として得られる「物」を念頭においての叙述か。六 以下は、世俗において価値ありとされるものを捨てた例であり、しかも捨てたという行為がよしと評價された例である。このような行為は因果の理を信じた行為と同一である、と説かれる。「流頭」は↑上巻序。ただし上巻序では貪欲の例とされるが、ここでは無価値な糧を食うことに重点がおかれ、貪欲を離れた例とされている。同じ物が同一の書物の中で相反する譬喩に用いられることは考えにくい。いまかりにこのように解しておく。セ 未明、父母死して財を弟とわから、さらにに之を財を弟に与えたが、妻の弟を罵るにおよび、妻を離縁した孝子伝。矢作武の指摘がある。ハ 許田、勇より天下を譲られ許して山中に隠れ、さらに九州の長として魏に召されたが、聞くことを欲せずとして潁水にて耳を洗った。弟父、牛を牽きて来り、勇より召しがあつたのは許田自身に名譽を求める心が存したからだ、と嫌した(史記正義所引高士伝・史記伯夷列伝)。ハ 欲界、色界、無色界。二 さまさまなことを自分のかかわりのあることとして。二 曇光(僧曇光)が虎に姿を變じた山神に恐れなかつたこと(高僧傳十一)をさす。虎を馴伏



漏るる事<sup>一</sup>、今聞<sup>二</sup>く所に随<sup>三</sup>ひてしばらく載<sup>四</sup>さまくのみ。賢<sup>五</sup>授りて惟<sup>六</sup>ひ付れ  
ば、心の塗<sup>七</sup>は、  
者は鉄<sup>八</sup>の杖<sup>九</sup>身<sup>一〇</sup>に加<sup>一一</sup>はり、善<sup>一二</sup>を好<sup>一三</sup>む者は金<sup>一四</sup>の珠<sup>一五</sup>体<sup>一六</sup>に装<sup>一七</sup>ふ。譬<sup>一八</sup>へば押<sup>一九</sup>さば向<sup>二〇</sup>ひ依<sup>二一</sup>り、  
牽<sup>二二</sup>かば避<sup>二三</sup>け斥<sup>二四</sup>き、加<sup>二五</sup>へば損<sup>二六</sup>滅<sup>二七</sup>ひ、除<sup>二八</sup>かば満<sup>二九</sup>益<sup>三〇</sup>すが如<sup>三一</sup>し。流<sup>三二</sup>頭の糠<sup>三三</sup>を食<sup>三四</sup>み、朱<sup>三五</sup>明<sup>三六</sup>  
の宝<sup>三七</sup>を捨て、許<sup>三八</sup>由<sup>三九</sup>の耳<sup>四〇</sup>を洗<sup>四一</sup>ひ、美<sup>四二</sup>父<sup>四三</sup>の牛<sup>四四</sup>を引<sup>四五</sup>く、あに此<sup>四六</sup>の意<sup>四七</sup>に異<sup>四八</sup>ならむや。死<sup>四九</sup>  
にて三<sup>五〇</sup>界<sup>五一</sup>を還<sup>五二</sup>ること車<sup>五三</sup>の輪<sup>五四</sup>の如<sup>五五</sup>し。生<sup>五六</sup>れて六<sup>五七</sup>道<sup>五八</sup>を廻<sup>五九</sup>ること荊<sup>六〇</sup>の移<sup>六一</sup>くが似<sup>六二</sup>し。此<sup>六三</sup>  
に死<sup>六四</sup>に彼<sup>六五</sup>に生<sup>六六</sup>れ、具<sup>六七</sup>に万<sup>六八</sup>の苦<sup>六九</sup>を受<sup>七〇</sup>く。患<sup>七一</sup>しき因<sup>七二</sup>は轡<sup>七三</sup>を連<sup>七四</sup>ねて苦<sup>七五</sup>の処<sup>七六</sup>に移<sup>七七</sup>る。  
善<sup>七八</sup>き業<sup>七九</sup>は縁<sup>八〇</sup>を攀<sup>八一</sup>ちて安<sup>八二</sup>き界<sup>八三</sup>に引<sup>八四</sup>く。願<sup>八五</sup>ひ慈<sup>八六</sup>ぶるに頼<sup>八七</sup>りて膝<sup>八八</sup>の前に賢<sup>八九</sup>を懷<sup>九〇</sup>く。  
生<sup>九一</sup>て愛<sup>九二</sup>ぶるに由<sup>九三</sup>りて頂<sup>九四</sup>の上に羽<sup>九五</sup>を棲<sup>九六</sup>はしむ。孟<sup>九七</sup>嘗<sup>九八</sup>の七<sup>九九</sup>の善<sup>一〇〇</sup>と、魯<sup>一〇一</sup>恭<sup>一〇二</sup>の三<sup>一〇三</sup>の  
異<sup>一〇四</sup>とは、けだし斯<sup>一〇五</sup>の意<sup>一〇六</sup>なり。然<sup>一〇七</sup>れども景<sup>一〇八</sup>戒<sup>一〇九</sup>、性<sup>一一〇</sup>を棄<sup>一一一</sup>くること聡<sup>一一二</sup>くあらず。  
口<sup>一一三</sup>に談<sup>一一四</sup>ること利<sup>一一五</sup>くあらず。神<sup>一一六</sup>の遲<sup>一一七</sup>鈍<sup>一一八</sup>きこと鋸<sup>一一九</sup>の刀<sup>一二〇</sup>に同<sup>一二一</sup>じくして、字<sup>一二二</sup>を連<sup>一二三</sup>居<sup>一二四</sup>けど  
も華<sup>一二五</sup>しくあらず。情<sup>一二六</sup>の意<sup>一二七</sup>意<sup>一二八</sup>なること船<sup>一二九</sup>に刻<sup>一三〇</sup>めるに同<sup>一三一</sup>じくして、文<sup>一三二</sup>を編<sup>一三三</sup>造<sup>一三四</sup>れども  
句<sup>一三五</sup>を乱<sup>一三六</sup>す。善<sup>一三七</sup>を貪<sup>一三八</sup>ふことの至<sup>一三九</sup>に勝<sup>一四〇</sup>へず、拙<sup>一四一</sup>くも淨<sup>一四二</sup>き紙<sup>一四三</sup>を躑<sup>一四四</sup>し、口<sup>一四五</sup>伝<sup>一四六</sup>を謬<sup>一四七</sup>注<sup>一四八</sup>し、  
瞞<sup>一四九</sup>て婉<sup>一五〇</sup>ち慮<sup>一五一</sup>りて忝<sup>一五二</sup>ぢ、顔<sup>一五三</sup>醜<sup>一五四</sup>り耳<sup>一五五</sup>熱<sup>一五六</sup>し。庶<sup>一五七</sup>はくは、拾<sup>一五八</sup>めたる文<sup>一五九</sup>を觀<sup>一六〇</sup>る者<sup>一六一</sup>、天<sup>一六二</sup>に  
愧<sup>一六三</sup>ぢ人<sup>一六四</sup>に慙<sup>一六五</sup>ぢて事<sup>一六六</sup>を忍<sup>一六七</sup>び事<sup>一六八</sup>を忘<sup>一六九</sup>れよ、心<sup>一七〇</sup>の師<sup>一七一</sup>と作りて心<sup>一七二</sup>を師<sup>一七三</sup>とすることなかれ、  
と。此<sup>一七四</sup>の功<sup>一七五</sup>徳<sup>一七六</sup>に藉<sup>一七七</sup>りて、右<sup>一七八</sup>の腋<sup>一七九</sup>に福<sup>一八〇</sup>徳<sup>一八一</sup>の翻<sup>一八二</sup>を著<sup>一八三</sup>けて冲<sup>一八四</sup>虚<sup>一八五</sup>の表<sup>一八六</sup>に翔<sup>一八七</sup>り、左<sup>一八八</sup>の脇<sup>一八九</sup>に

させた僧の説話は高僧伝にも少なくないが、諸経要眞の対向より曇光の事蹟と推測。所以曇光釈子、降、曇光於餘前、轉輪仙人、宿、曇光於頂上二(諸経要眞、大徳部、海遠篇、求意、)。一願生慈愛が二句に分割されている。ニトヲ。国会図書館本訓釈(止、)。元来は別の獻をさした。爾雅、爾雅、賈、有、力、唐人、以、賈、為、虎、賈、太、祖、之、諱、也、(攷証)。唐の太祖は李虎。一三尚闍利が樹下にて坐禪している間に、鳥が髻の中に卵を産んだ。尚闍利はそれを知ったが鳥の子が飛び去るまで立ち上がらなかった(大智度論・十七)。二孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。三孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。四孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。五孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。六孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。七孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。八孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。九孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。十孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。十一孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。十二孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。十三孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。十四孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。十五孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。十六孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。十七孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。十八孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。十九孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。二十孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。二十一孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。二十二孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。二十三孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。二十四孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。二十五孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。二十六孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。二十七孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。二十八孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。二十九孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。三十孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。三十一孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。三十二孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。三十三孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。三十四孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。三十五孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。三十六孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。三十七孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。三十八孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。三十九孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。四十孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。四十一孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。四十二孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。四十三孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。四十四孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。四十五孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。四十六孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。四十七孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。四十八孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。四十九孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。五十孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。五十一孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。五十二孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。五十三孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。五十四孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。五十五孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。五十六孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。五十七孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。五十八孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。五十九孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。六十孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。六十一孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。六十二孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。六十三孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。六十四孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。六十五孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。六十六孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。六十七孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。六十八孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。六十九孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。七十孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。七十一孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。七十二孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。七十三孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。七十四孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。七十五孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。七十六孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。七十七孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。七十八孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。七十九孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。八十孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。八十一孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。八十二孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。八十三孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。八十四孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。八十五孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。八十六孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。八十七孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。八十八孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。八十九孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。九十孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。九十一孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。九十二孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。九十三孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。九十四孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。九十五孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。九十六孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。九十七孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。九十八孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。九十九孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。百孟嘗、字は伯周、後漢書、循吏列伝に伝がある。

智慧の炬を燭して仏性の頂に登り、普く群の生に施して、共に仏の道を成らむ。

己が高徳を恃み賤しき形の沙弥を刑ちて現に患しき死を得る縁 第一

諸<sup>一</sup>葉<sup>二</sup>宮<sup>三</sup>に宇<sup>四</sup>大<sup>五</sup>八<sup>六</sup>嶋<sup>七</sup>国<sup>八</sup>備<sup>九</sup>めたまひし勝<sup>一〇</sup>宝<sup>一一</sup>心<sup>一二</sup>眞<sup>一三</sup>聖<sup>一四</sup>武<sup>一五</sup>太<sup>一六</sup>上天<sup>一七</sup>皇<sup>一八</sup>、大<sup>一九</sup>なる誓<sup>二〇</sup>願<sup>二一</sup>を  
発<sup>二二</sup>し、天平<sup>二三</sup>元年<sup>二四</sup>己巳<sup>二五</sup>の春<sup>二六</sup>二<sup>二七</sup>月<sup>二八</sup>の八<sup>二九</sup>日に、左<sup>三〇</sup>京<sup>三一</sup>の元<sup>三二</sup>興<sup>三三</sup>寺<sup>三四</sup>にて、大<sup>三五</sup>なる法<sup>三六</sup>会<sup>三七</sup>を  
備<sup>三八</sup>け、三<sup>三九</sup>宝<sup>四〇</sup>に供<sup>四一</sup>養<sup>四二</sup>したまふ。太<sup>四三</sup>政<sup>四四</sup>大<sup>四五</sup>臣<sup>四六</sup>正<sup>四七</sup>二<sup>四八</sup>位<sup>四九</sup>長<sup>五〇</sup>屋<sup>五一</sup>親<sup>五二</sup>王<sup>五三</sup>に勅<sup>五四</sup>して、衆<sup>五五</sup>の僧<sup>五六</sup>に供<sup>五七</sup>  
ふる司<sup>五八</sup>に任<sup>五九</sup>てたまふ。時<sup>六〇</sup>に一<sup>六一</sup>の沙<sup>六二</sup>弥<sup>六三</sup>有<sup>六四</sup>り。濫<sup>六五</sup>しく供<sup>六六</sup>養<sup>六七</sup>を饒<sup>六八</sup>る処<sup>六九</sup>に就<sup>七〇</sup>きて、鉢<sup>七一</sup>  
を捧<sup>七二</sup>げ飯<sup>七三</sup>を受<sup>七四</sup>く。親<sup>七五</sup>王<sup>七六</sup>見<sup>七七</sup>たまひて、牙<sup>七八</sup>冊<sup>七九</sup>を以<sup>八〇</sup>ちて沙<sup>八一</sup>弥<sup>八二</sup>の頭<sup>八三</sup>を罰<sup>八四</sup>ちたまふ。頭<sup>八五</sup>破<sup>八六</sup>  
れ血<sup>八七</sup>流<sup>八八</sup>る。沙<sup>八九</sup>弥<sup>九〇</sup>頭<sup>九一</sup>を摩<sup>九二</sup>で、血<sup>九三</sup>を捫<sup>九四</sup>ひて恸<sup>九五</sup>み哭<sup>九六</sup>きて忽<sup>九七</sup>に觀<sup>九八</sup>えず。去<sup>九九</sup>る所<sup>一〇〇</sup>を知らず。  
時<sup>一〇一</sup>に法<sup>一〇二</sup>会<sup>一〇三</sup>の衆<sup>一〇四</sup>道<sup>一〇五</sup>俗<sup>一〇六</sup>僧<sup>一〇七</sup>に嗔<sup>一〇八</sup>きて言<sup>一〇九</sup>はく「凶<sup>一一〇</sup>し。善<sup>一一一</sup>くあらず」といふ。二<sup>一一二</sup>日<sup>一一三</sup>を還<sup>一一四</sup>  
て、嫉<sup>一一五</sup>妬<sup>一一六</sup>む人<sup>一一七</sup>有<sup>一一八</sup>りて天<sup>一一九</sup>皇<sup>一二〇</sup>に讒<sup>一二一</sup>ちて奏<sup>一二二</sup>さく「長<sup>一二三</sup>屋<sup>一二四</sup>社<sup>一二五</sup>稷<sup>一二六</sup>を傾<sup>一二七</sup>け国<sup>一二八</sup>位<sup>一二九</sup>を奪<sup>一三〇</sup>はむこと  
を謀<sup>一三一</sup>る」とまうす。爰<sup>一三二</sup>に天<sup>一三三</sup>心<sup>一三四</sup>に瞋<sup>一三五</sup>怒<sup>一三六</sup>りて、軍<sup>一三七</sup>兵<sup>一三八</sup>を遣<sup>一三九</sup>し陳<sup>一四〇</sup>ねたまふ。親<sup>一四一</sup>王<sup>一四二</sup>自<sup>一四三</sup>づか  
ら念<sup>一四四</sup>ひたまはく「罪<sup>一四五</sup>無<sup>一四六</sup>くして囚<sup>一四七</sup>執<sup>一四八</sup>はる。此<sup>一四九</sup>れ決<sup>一五〇</sup>定<sup>一五一</sup>めて死<sup>一五二</sup>なむ。他<sup>一五三</sup>に刑<sup>一五四</sup>殺<sup>一五五</sup>さるる

第一縁 長屋王の妾を因害の理によって説明する。隱身の罪を迫害した悪業に対しての惡報とされる。御靈信仰的な記述も含まれている。今昔物語集二二ノ二十七に書承。扶桑略記神龜六年条に引用。  
二七二五年。神龜六年八月五日、改元して天平元年(續紀)。この法会に関しては、本説話以外に所伝をみない。金堂の竣工にかかわるか、とするのは太田博士の説。三長屋王。云大臣正二位長屋王(續紀・天平元年二月十日条)。「長屋親王」とする例は長屋王家木簡にみえる。三沙弥は衆僧には含まれないのであろう。四牙笏。象牙製の笏。笏の音はコチ、コツ。笏を「しやく」と称するのは「尺」の音を借用したことに由来する。唐代には一尺の笏が用いられたらしい。南海寄帰内法伝一には笏尺という単位がみえる(條訓註に指摘がある)、著聞する維摩の方丈室も王公侯の計則では十笏とされる(たとえは法苑珠林・感通篇・聖迹篇)。「事」と同音の「コチ、コツ」が忘れた、とする説が通行する。「世」はサク、シャクの音をあらわす。「笏」四声字苑云「笏音忽、俗云尺」、手板長一尺六寸、闊三寸、厚五分也(和名抄)。牙笏は五位以上の者が把る(續紀養老三二年二月三日条)。五小声でいう。名義勢に「笏」サ、メクとあるが、「世」をこの意で用いた例は他にみえない。六二月辛未、左京人從七位上條部造善足、無位中臣宮如連東人等、告密稱、左大臣正二位長屋王、私學左道、欲傾國家二(續紀・天平元年二月十日条)。七他人に殺されることは、自殺することに及ばない。「為」他刑殺と「自死」を比較し、「自死」をえらぶ。原文「為」他刑殺は「為」の文型で被動を示す。



主、良久主来、乃其尼等<sup>16</sup>曰、從<sup>17</sup>此篋中、有<sup>18</sup>生物声、吾欲<sup>19</sup>買之、故待<sup>20</sup>汝耳、篋主对曰、非<sup>21</sup>生物也、尼等乞之、而猶不<sup>22</sup>止、于<sup>23</sup>時市人評曰、可<sup>24</sup>開其篋、々主困然、捨<sup>25</sup>篋奔走、後開見之、其像存焉、尼等歡喜、流<sup>26</sup>淚泣<sup>27</sup>粉曰、吾先失<sup>28</sup>斯像、日夜奉<sup>29</sup>恋、今邂逅遇、嗟呼慶哉、市人聞之、来集称歎、尼等歡喜、放<sup>30</sup>生修<sup>31</sup>福、遂安<sup>32</sup>本寺、道俗歸敬、斯乃奇異之事也、

日本国現報善惡靈異記上卷

16 曰  
17 從  
18 有  
19 欲  
20 故  
21 非  
22 止  
23 于  
24 可  
25 困  
26 流  
27 泣  
28 先  
29 奉  
30 放  
31 修  
32 遂

日本国現報善惡靈異記中卷

諾樂右京藥師寺沙門景戒錄

竊<sup>3</sup>觀<sup>4</sup>上代、自<sup>5</sup>宣化天皇<sup>6</sup>以往、隨<sup>7</sup>外道、憑<sup>8</sup>卜者、自<sup>9</sup>欽明天皇<sup>10</sup>之後、敬<sup>11</sup>三宝、信<sup>12</sup>正教、然或皇臣燒<sup>13</sup>寺流<sup>14</sup>仏像、或皇臣建<sup>15</sup>寺弘<sup>16</sup>仏法、之中、勝<sup>17</sup>宝心真聖武<sup>18</sup>太上天皇、尤造<sup>19</sup>大仏、長紹<sup>20</sup>法種、剃<sup>21</sup>鬚髮、著<sup>22</sup>袈裟、受<sup>23</sup>戒脩<sup>24</sup>善、以<sup>25</sup>正治民、慈<sup>26</sup>及<sup>27</sup>動植、德<sup>28</sup>秀<sup>29</sup>千古、得<sup>30</sup>一無<sup>31</sup>運、通<sup>32</sup>三居、靈<sup>33</sup>、由<sup>34</sup>此福德、飛<sup>35</sup>空之<sup>36</sup>、昨<sup>37</sup>芝草<sup>38</sup>茸<sup>39</sup>寺、走<sup>40</sup>地之<sup>41</sup>蟻、構<sup>42</sup>金沙<sup>43</sup>建<sup>44</sup>塔、法幢<sup>45</sup>高堅、而幡<sup>46</sup>足<sup>47</sup>八方、慧<sup>48</sup>船<sup>49</sup>輕汎、而帆<sup>50</sup>影<sup>51</sup>屬<sup>52</sup>九天、瑞<sup>53</sup>心<sup>54</sup>之<sup>55</sup>華、競<sup>56</sup>而<sup>57</sup>開<sup>58</sup>国邑、善<sup>59</sup>惡之<sup>60</sup>報、現<sup>61</sup>而<sup>62</sup>示<sup>63</sup>吉凶、故<sup>64</sup>号<sup>65</sup>稱<sup>66</sup>勝<sup>67</sup>宝心真聖武<sup>68</sup>太上天皇<sup>69</sup>焉、唯<sup>70</sup>以<sup>71</sup>是<sup>72</sup>天皇<sup>73</sup>代、所<sup>74</sup>錄<sup>75</sup>善<sup>76</sup>惡<sup>77</sup>表<sup>78</sup>多数者、由<sup>79</sup>聖<sup>80</sup>皇<sup>81</sup>德<sup>82</sup>、顯<sup>83</sup>事<sup>84</sup>最多、漏<sup>85</sup>事<sup>86</sup>、今<sup>87</sup>隨<sup>88</sup>所<sup>89</sup>聞、且<sup>90</sup>載<sup>91</sup>耳、覈<sup>92</sup>搜<sup>93</sup>惟<sup>94</sup>付、心<sup>95</sup>塗<sup>96</sup>易<sup>97</sup>之<sup>98</sup>者、鉄<sup>99</sup>杖<sup>100</sup>加<sup>101</sup>身、好<sup>102</sup>善之<sup>103</sup>者、金<sup>104</sup>珠<sup>105</sup>装<sup>106</sup>体、譬<sup>107</sup>如<sup>108</sup>押<sup>109</sup>之<sup>110</sup>向<sup>111</sup>依、牽<sup>112</sup>之<sup>113</sup>遮<sup>114</sup>斥、加<sup>115</sup>也<sup>116</sup>損<sup>117</sup>滅、除<sup>118</sup>也<sup>119</sup>滿<sup>120</sup>益、流<sup>121</sup>頭<sup>122</sup>食<sup>123</sup>糠、朱<sup>124</sup>明<sup>125</sup>捨<sup>126</sup>宝、許<sup>127</sup>由<sup>128</sup>洗<sup>129</sup>耳、吳<sup>130</sup>父<sup>131</sup>引<sup>132</sup>牛、豈<sup>133</sup>異<sup>134</sup>此<sup>135</sup>意<sup>136</sup>歟、死<sup>137</sup>還<sup>138</sup>三<sup>139</sup>界、如<sup>140</sup>車<sup>141</sup>輪<sup>142</sup>、生<sup>143</sup>廻<sup>144</sup>六<sup>145</sup>道、似<sup>146</sup>辨<sup>147</sup>移<sup>148</sup>、此<sup>149</sup>死<sup>150</sup>彼<sup>151</sup>生、具<sup>152</sup>受<sup>153</sup>万<sup>154</sup>苦、惡<sup>155</sup>因<sup>156</sup>連<sup>157</sup>纏<sup>158</sup>苦<sup>159</sup>処、善<sup>160</sup>業<sup>161</sup>緣<sup>162</sup>引<sup>163</sup>安<sup>164</sup>堺、頼<sup>165</sup>願<sup>166</sup>慈<sup>167</sup>而<sup>168</sup>膝<sup>169</sup>前<sup>170</sup>懷<sup>171</sup>贊<sup>172</sup>、由<sup>173</sup>生<sup>174</sup>愛<sup>175</sup>以<sup>176</sup>頂<sup>177</sup>上<sup>178</sup>棲<sup>179</sup>羽、孟<sup>180</sup>嘗<sup>181</sup>之<sup>182</sup>七<sup>183</sup>善<sup>184</sup>、魯<sup>185</sup>恭<sup>186</sup>之<sup>187</sup>三<sup>188</sup>異<sup>189</sup>、蓋<sup>190</sup>斯<sup>191</sup>意<sup>192</sup>之<sup>193</sup>矣、然<sup>194</sup>景<sup>195</sup>戒<sup>196</sup>、稟<sup>197</sup>性<sup>198</sup>不<sup>199</sup>聰、談<sup>200</sup>口<sup>201</sup>不<sup>202</sup>利、神<sup>203</sup>遲<sup>204</sup>鈍、同<sup>205</sup>於<sup>206</sup>鋸<sup>207</sup>刀、連<sup>208</sup>居<sup>209</sup>字<sup>210</sup>不<sup>211</sup>華、情<sup>212</sup>眷<sup>213</sup>戀、同<sup>214</sup>於<sup>215</sup>刻<sup>216</sup>船、編<sup>217</sup>造<sup>218</sup>文<sup>219</sup>乱<sup>220</sup>句、不<sup>221</sup>勝<sup>222</sup>貪<sup>223</sup>善<sup>224</sup>之<sup>225</sup>至、拙

1 日本国現報善惡靈異記中卷  
(国) 一  
2 諾樂右京藥師寺沙門景戒錄  
3 觀 上  
4 宣 一  
5 之 一  
6 太 大  
7 髮 大  
8 德 大  
9 通 三 靈 上 三 靈 一 居  
10 上 三 君  
11 敷 一  
12 帆 大  
13 太 大  
14 寶 一  
15 底 本 破 損  
16 体 鉢  
17 斥 一  
18 朱 一  
19 洗 繞  
20 父 文  
21 死 一  
22 膝 勝  
23 懷 一  
24 贊 一  
25 上 上  
26 孟 嘗  
27 魯 恭  
28 之 一  
29 三 異  
30 蓋 斯  
31 意 之  
32 然 景  
33 戒 稟  
34 性 不  
35 聰 談  
36 口 不  
37 利 神  
38 遲 鈍  
39 同 於  
40 鋸 刀  
41 連 居  
42 字 不  
43 華 情  
44 眷 戀  
45 同 於  
46 刻 船  
47 編 造  
48 文 乱  
49 句 不  
50 勝 貪  
51 善 之  
52 至 拙



黷淨紙、謬注口伝、<sup>30</sup>醜婢慮奈、<sup>31</sup>顏醜耳熱、<sup>32</sup>床觀拾文者、愧天慙人、忍事忘事、<sup>33</sup>作心之師、<sup>34</sup>莫心為師、<sup>35</sup>藉此功德、<sup>36</sup>右腋著福徳之翮、<sup>37</sup>而翔於冲虚之表、<sup>38</sup>左脇觸智慧之炬、<sup>39</sup>而登於仏性之頂、<sup>40</sup>普施群生、<sup>41</sup>共成仏道也、

特己高德、刑、賤形沙弥、以現得惠死、緣第一

諾樂宮御宇、大八嶋國勝室心眞聖武天皇、<sup>1</sup>發大誓願、以天平元年己巳春二月八日、<sup>2</sup>於左京元興寺、備大法會、供養三宝、<sup>3</sup>勅太政大臣正二位長屋親王、而任於供衆僧之司、<sup>4</sup>時有沙弥、<sup>5</sup>濫就供養之處、<sup>6</sup>捧鉢受飯、<sup>7</sup>親王見之、以牙冊以罰沙弥之頭、<sup>8</sup>々破流血、<sup>9</sup>沙弥摩頭、<sup>10</sup>捫血恸哭、而忽不覩、<sup>11</sup>所去不知、<sup>12</sup>時法會衆、道俗僣之、<sup>13</sup>凶之、不善矣、<sup>14</sup>逕之二日、有嫉妬人、<sup>15</sup>譏天皇、<sup>16</sup>奏長屋謀傾社稷、<sup>17</sup>將奪國位、<sup>18</sup>爰天心曠怒、<sup>19</sup>遣軍兵陳之、<sup>20</sup>親王自念、無罪而被囚執、<sup>21</sup>此決定死、<sup>22</sup>為他刑殺、<sup>23</sup>不如自死、<sup>24</sup>即其子孫、<sup>25</sup>令服毒藥、<sup>26</sup>而絞死畢後、<sup>27</sup>親王服藥而自害、<sup>28</sup>天皇勅捨彼屍骸於城之外、<sup>29</sup>而燒未散、<sup>30</sup>河、<sup>31</sup>擲海、<sup>32</sup>唯親王骨、<sup>33</sup>流于土左國、<sup>34</sup>時其國百姓多死云、<sup>35</sup>百姓患之、<sup>36</sup>而解官言、<sup>37</sup>依親王氣、<sup>38</sup>國內百姓、<sup>39</sup>可皆死亡、<sup>40</sup>天皇聞之、<sup>41</sup>為近皇都、<sup>42</sup>置于紀伊國海部郡板村、<sup>43</sup>與嶋、<sup>44</sup>嗚呼憫哉、<sup>45</sup>福貴儼之時、<sup>46</sup>高名雖振、<sup>47</sup>垂裔而妖、<sup>48</sup>災霧之日、<sup>49</sup>無所歸、<sup>50</sup>唯一旦滅也、<sup>51</sup>誠知、<sup>52</sup>怙自高德、<sup>53</sup>刑彼沙弥、<sup>54</sup>護法噴峨、<sup>55</sup>善神慙嫌、<sup>56</sup>著袈裟之類、<sup>57</sup>雖賤形、<sup>58</sup>不応不恐、<sup>59</sup>隱身聖人、<sup>60</sup>交其中、<sup>61</sup>故、<sup>62</sup>僞慢經云、<sup>63</sup>先生位上人、<sup>64</sup>釈迦牟尼仏頂、<sup>65</sup>佩服跣人、<sup>66</sup>等罪云々、<sup>67</sup>何況著袈裟之

30 醜(國)醜(眞)醜(勝)  
31 慮奈(眞)一  
32 顏(眞)一  
33 事(眞)一  
34 作(眞)一  
35 心(眞)一  
36 右(眞)一  
37 福徳(眞)一  
38 冲虚(眞)一  
39 左(眞)一  
40 普施(眞)一  
41 共成(眞)一

1 鉢  
2 鉢(采)一ナシ  
3 嗚(采)一ナシ  
4 不(采)一ナシ  
5 爰(采)一受  
6 未一未  
7 河(采)一所  
8 村一抄  
9 災(采)一女  
10 婦(采)一婦  
11 釈一尺

人、打侮之者、其罪甚深矣、

見鳥邪姪、獸世修善緣第二

禪師信藏者、和泉國泉郡大領、<sup>1</sup>血沼原主倭麻呂也、<sup>2</sup>聖武天皇御世人也、<sup>3</sup>此大領家之門、<sup>4</sup>有大樹、<sup>5</sup>鳥作巢產兒、<sup>6</sup>抱之而臥、<sup>7</sup>雄鳥還飛飛行求食、<sup>8</sup>養抱兒之妻、<sup>9</sup>求食行之頃、<sup>10</sup>他鳥遇來而婚、<sup>11</sup>奸婚今夫、<sup>12</sup>就心共高翳空、<sup>13</sup>指於北而飛、<sup>14</sup>妻見不醜、<sup>15</sup>于時先夫鳥、<sup>16</sup>食物哺持來、<sup>17</sup>見之無妻鳥、<sup>18</sup>于時慈兒、<sup>19</sup>抱之而臥、<sup>20</sup>不求食物、<sup>21</sup>而經數日、<sup>22</sup>大領見之、<sup>23</sup>使入登樹、<sup>24</sup>見其巢、<sup>25</sup>抱兒而死、<sup>26</sup>大領見之、<sup>27</sup>大慈愍心、<sup>28</sup>視鳥邪姪、<sup>29</sup>獸世出家、<sup>30</sup>離妻子捨官位、<sup>31</sup>隨行基大德、<sup>32</sup>修善求道、<sup>33</sup>名曰信藏、<sup>34</sup>但要語曰、<sup>35</sup>与大德俱死、<sup>36</sup>必當同往西方、<sup>37</sup>大領之妻、<sup>38</sup>亦血沼原主也、<sup>39</sup>大領捨之後者、<sup>40</sup>終無他心、<sup>41</sup>々慎貞潔、<sup>42</sup>爰男子得病、<sup>43</sup>臨命終時、<sup>44</sup>而白母言、<sup>45</sup>飲母乳者、<sup>46</sup>心延我命、<sup>47</sup>母隨子言、<sup>48</sup>乳令飲、<sup>49</sup>病子、<sup>50</sup>子飲乳而歎之言、<sup>51</sup>噫乎、<sup>52</sup>捨母甜乳、<sup>53</sup>而我死哉、<sup>54</sup>即命終焉、<sup>55</sup>然大領之妻、<sup>56</sup>恋於死子、<sup>57</sup>同共出家、<sup>58</sup>修習善法、<sup>59</sup>信藏禪師、<sup>60</sup>無幸少緣、<sup>61</sup>自行基大德、<sup>62</sup>先命終也、<sup>63</sup>大德哭詠作歌曰、<sup>64</sup>加良須止伊布於保乎蘇止利能去乎能、<sup>65</sup>未止母爾止伊比天佐岐陀智伊奴留、<sup>66</sup>夫將火炬時、<sup>67</sup>先備蘭松、<sup>68</sup>將雨降時、<sup>69</sup>兼潤石板、<sup>70</sup>示鳥鄙事、<sup>71</sup>領發道心、<sup>72</sup>先善方便、<sup>73</sup>見苦居道者、<sup>74</sup>其斯謂之矣、<sup>75</sup>欲界雜類、<sup>76</sup>鄙行如是、<sup>77</sup>獸者背之、<sup>78</sup>愚者貪之、<sup>79</sup>贊曰、<sup>80</sup>可哉血沼原主氏、<sup>81</sup>瞰鳥邪姪、<sup>82</sup>獸俗塵、<sup>83</sup>背浮花飯、<sup>84</sup>趣常淨、<sup>85</sup>身勤修善、<sup>86</sup>祈惠命、<sup>87</sup>心剋安養、<sup>88</sup>期解脫、<sup>89</sup>是世間異秀獸士者也、

1 沼一治  
2 整(國)一改  
3 也(采)一ナシ  
4 後(采)一ナシ  
5 乳(采)一ナシ  
6 未一米  
7 火(國)一大  
8 板(國)一坂  
9 沼一治